

岩手県における大豆品種「シュウリュウ」の栽培法

伊藤信二・荻内謙吾*・中西商量**

(岩手県農林水産部・*岩手県農業研究センター・**岩手県農業研究センター県北農業研究所)

Cultivation Method of a Soybean Cultivar “Shuryu” in Iwate Prefecture

Shinji ITO, Kengo OGIUCHI* and Akikazu NAKANISHI**

(Iwate Prefectural Agriculture, Forestry and Fishers Department・

*Iwate Agricultural Research Center・**IARC Kenpoku Agricultural Institute

1 はじめに

現在、岩手県内で栽培されている大豆品種は、連作や倒伏による減収、しわ粒の発生による品質低下などが問題となっている。そのため、生産者からは多収・良質な品種の導入が望まれていた。岩手県では、2014年2月に大豆品種「シュウリュウ」を県の奨励品種に編入し、2014年は約30haでの一般栽培が行われている。「シュウリュウ」は、多収、大粒で外観品質が良く、耐倒伏性および豆腐加工適性に優れる特徴を持つ。本研究では、「シュウリュウ」の多収、高品質を確保するための栽培法について検討したので報告する。

2 試験方法

(1) 播種期・栽植密度試験

1) 試験年次 2011～2013年

2) 試験場所 岩手県北上市

3) 播種期

早播：5月25日、標播：6月3日、晩播：6月20日

4) 栽植密度

条間70cm、株間：10cm、15cm、1株1本立て

5) 施肥量

基肥：窒素、リン酸、カリ 各4、18、13kg/10a

(2) ベンタゾン液剤薬害対策試験

1) 試験年次 2011～2012年

2) 試験場所 岩手県北上市

3) 播種期

2011年：6月13日、2012年：6月15日

4) 栽植密度

条間70cm、株間15cm、1本立て

5) ベンタゾン液剤処理時期

大豆2葉期及び5葉期

6) ベンタゾン液剤処理量

100及び150ml/10a

3 試験結果及び考察

(1) 播種期・栽植密度試験

表1に示したように、シュウリュウの成熟期は晩播するほど遅くなり、生育量は晩播するほどあるいは疎植（株間が短い）ほど主茎長が短く、分枝数は多くなるものの、稔実莢数が少なくなる傾向が認められた。

収量については、早播は標播よりも10%程度少なく、倒伏が多い傾向が認められた。また、晩播は、標播よりもやや減収するものの、密植により増収し、外観品質は標播よりも良好となった。品種別には、シュウリュウはリュウホウよりも10%程度多収となる傾向が認められた。

(2) ベンタゾン液剤薬害対策試験

ベンタゾン液剤の処理時期、処理濃度別の薬害発生程度と回復程度の結果を表2に示した。2葉期処理においては、散布5日後に両処理量ともに葉の褐変、葉巻き、色抜けの初期薬害が発生したが、時間の経過とともに薬害症状は小さくなった。5葉期処理においても、2葉期処理と同様に散布5日後に初期薬害が発生したが、その程度は2葉期処理よりも軽く、散布20日後には薬害症状は認められなくなった。また、薬害の回復程度は、100ml/10a処理が150ml/10a処理よりも早かった。

ベンタゾン液剤の処理時期、処理濃度別の収量と減収程度の結果を表3に示した。減収率は、最大で無処理比13%であった。5葉期処理は2葉期処理よりも減収程度が低く、さらに100ml/10a処理は、いずれの処理時期においても150ml/10a処理よりも減収程度が小さかった。

処理後2日間の積算日照時間と薬害・減収率の

関係について調査したところ (図 1)、処理日及びその翌日の日照時間が合計で 10 時間程度までは葉害程度が 1 以下で、減収もみられないことが明らかとなり、半日～1 日を通して曇天が続く時を見計らって処理することにより、減収を抑えることができると考えられた。

4 ま と め

播種期については、収量の確保及び倒伏を防ぐ

ために標播が望ましいこと、多収の為には栽植密度を 1～1.5 万本/10a (条間 70cm、株間 10～15cm 程度) とし、晩播の場合には 1.5 万本程度のやや密植とすることが望ましいと考えられた。

ベンタゾン液剤の葉害対策として、早い処理時期及び低処理量、ならびに曇天時の処理により葉害による減収を抑えることができると考えられた。

表 1 播種期・栽植密度による成熟期生育量、収量及び品質

播種期 月・日	品種	株間 cm	成熟期 月・日	主茎長 cm	主茎節数 節	分枝数 本/株	稈実莢数 莢/m ²	子実重 kg/10a	子実重 %	百粒重 g	倒伏 0-5	裂皮粒 %	しわ粒 %
早播 5.25	シュウリュウ	15	10.1	57	15.5	4.4	612	292	111	31.4	3	3	2
	リュウホウ	15	9.31	61	15.2	5.2	533	264	(100)	34.2	3	3	13
標播 6.05	シュウリュウ	10	10.7	52	14.9	3.0	603	323	115	33.0	1	3	2
		15	10.8	45	15.0	4.9	599	326	113	34.7	1	2	6
	リュウホウ	10	10.5	49	13.2	3.2	623	281	(100)	32.9	3	5	18
		15	10.2	47	14.9	4.7	588	289	(100)	31.8	3	4	18
晩播 6.20	シュウリュウ	10	10.13	47	13.7	3.5	569	291	113	34.3	1	1	1
		15	10.14	43	14.1	4.7	545	276	103	33.6	1	1	1
	リュウホウ	10	10.12	45	12.9	3.9	519	258	(100)	29.3	2	2	6
		15	10.13	41	13.2	4.9	540	265	(100)	32.0	2	2	12

※子実重比は、同じ播種期、株間におけるリュウホウとの比。

表 2 ベンタゾン液剤の処理時期、処理濃度別の葉害発生程度と回復程度の比較

処理時期 大豆葉齢	処理量 ml/10a	処理時 大豆葉齢	散布 5 日後		散布 20 日後		回復程度
			葉害症状	程度	葉害症状	程度	
2 葉期	100	2.3	褐変、葉巻、色抜け	中	褐変	微	早い
	150	2.3	褐変、葉巻、色抜け	中	褐変、色抜け	小	やや遅い
5 葉期	100	5.7	褐変、葉巻、色抜け	微	なし	—	早い
	150	5.4	褐変、葉巻、色抜け	中	なし	—	早い

表 3 ベンタゾン液剤の処理時期、処理濃度別の収量と減収程度

処理時期 大豆葉齢	処理量 ml/10a	子実重 kg/10a	同左比 %	減収程度
無処理	—	370	100	—
2 葉期	100	336	91	小
	150	321	87	中
5 葉期	100	355	96	微
	150	340	92	小

※減収程度は、無：減収なし、微：0～5%未満、小：5～10%未満、中：10～15%未満、多：15～20%未満、甚：20%以上として判定した。

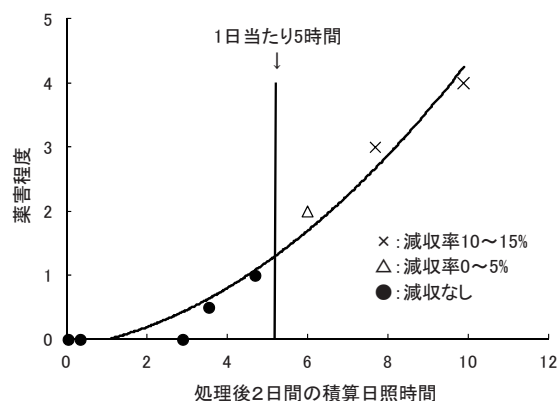


図 1 処理後 2 日間の積算日照時間と葉害・減収率の関係(2 葉期・100ml/10a 処理)